

殉教者ディートリヒ・ボンヘッフアー における讃美歌と詩篇

横 手 多佳子

はじめに

これまで、キリスト教讃美歌の起源はまず、ユダヤ教の礼拝における典礼と、最後の晩餐においてなされたイエスと彼の弟子たちとの神賛美にあることを論及してきた。さらにユダヤ教とイエスの神を讃える霊性は、教会に受け継がれ、キリスト教殉教者や宗教改革者たちによって表され、キリスト教会は讃美歌を生み出した。詩篇はユダヤ教とキリスト教における讃美歌として今日まで尊ばれている。この小論文ではディートリヒ・ボンヘッフアーという現代の殉教者をとりあつかう。彼の讃美歌と詩篇の霊性が、彼の生涯にどのような影響を与えたかを学んで見たいと願う。彼こそ、讃美歌としての詩篇と教会会衆讃美歌によって、命の極みまで、神への賛美をやめることのなかった神賛美の証人であり、キリスト教徒殉教者である。

* 金城学院大学礼拝オルガニスト・金城学院大学オルガニスト養成講座講師

序論

キリスト教徒殉教者の神賛美

ヨハネの黙示録には「礼拝的断片」¹、すなわち礼拝式の様々な部分が7箇所配置されている。そのことは黙示録の編集者の特別な意図が働いていることと関わっている²。その編集者の意図とは何であろうか。特徴的なのは、これら7つの「断片」は、いつも新しい世界が表れる直前に起こる終末の出来事の前に挿入されていることである。それら「礼拝的断片」は全て天上の礼拝の有様を現している。神学者エドワルド・ローゼ³はNTDの『黙示録注解書』⁴において、地上のキリスト教徒が礼拝で歌う讚美歌が、天上の礼拝でも歌われていることをあらわしているという。彼は「ヨハネ黙示録におけるキリストの歌は、初代の諸集会の礼拝がどのようなものであったかを示す具体例を提供している。ハレルヤという言葉(=「主を賛美せよ」)は、讚美歌の合唱を促す短いことばとして、ユダヤ教の礼拝から受け継がれたものである。」と解説している⁵。

キリストはその血によって、われわれを罪から救いたもうた、と集会の全員が語っている(一 5)。キリストは死んでいたが、いまや世々限りなく生きたもう(一 18)。天の合唱団は、次から次へと讚美に加わって歌い、創造者(四章)にして救い主(五章)なる神の支配をほめ歌う。聖なる、聖なる、聖なるかな、主なる神、万物の支配者(四

1 NTD 新約聖書注解(11)『ヨハネの黙示録』エドワルト・ローゼ、高橋三郎、三浦永光訳、NTD 新約聖書注解刊行会、昭和四十八年12月、103頁。

2 黙示録4章1-11、5章1-14、7章9-17、11章15-19、12章10-12、15章2-4、7章9-17、11章15-19、12章10-12、15章2-4、19章1-10。)

3 エドワルド・ローゼ、Eduard Lohse。

4 上掲書参照。

5 上掲書、103頁。

8)。玉座に座したもう方と小羊とは、世々限りなく、讚美、栄光、ほまれ、権力がふさわしい（五 13）。神の救いと権威と支配、および神の油そそがれた者〔キリスの力は「すでに現われ始めた 一 二 10）。神とキリストの究極の勝利を告げるこの歓呼の叫びによって（一九 1-10）、地上の集会は、天にあって完成された兄弟たちと結ばれているのである。⁶

ロゼは上記引用のようにヨハネ黙示録の全章に挿入されている「礼拝的断片」をまとめている。この「断片」という言葉は切れ端という意味に誤解されるかも知れない。しかし、そういう意味ではない。先に述べた様にヨハネの黙示録で新たな出来事が啓示される度ごとに、挿入されている「天上の礼拝」の場面、場面をさしている。その光景は地上のキリスト教徒を励ますものであった。ヨハネ黙示録の背景には、ローマ帝国という、キリスト教徒にとっては悪魔的な政治的暴力による残忍な迫害がある。黙示者ヨハネはそのような状況の中で、天上の光景という黙示を与えられた。それは、主なる神が座している天上において献げられている礼拝の光景である。地上の神の旅する民の礼拝は天の礼拝と結ばれている、と黙示者ヨハネによって、過酷な試練の中にいるキリスト者の群れは、慰めと励ましを受けることができた。「我らの主は十字架の主イエスである。」と感謝と賛美をささげる地上のキリスト教会の群れを励ましたのである。それこそが「礼拝的断片」の意義なのである。

第七の封印を小羊が開いた時、天に半時ほどの静寂が生れたことがヨハネ黙示録 8 章 1 節以下に記されている。この記事の直前に「礼拝的断片」が置かれている。それが 7 章 9-17 節である。ここには主なる天上の神の玉座の前に集まる大群衆の様子が伝えられている。その大群衆の中に、「白

6 同書同上, 104 頁。

とである。賛美する群れは大群衆であり、彼らは「白い衣」を身に着けていることが記されている。長老によって彼らがだれであるかが告げられる。長老は言う。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血であらって白くしたのである。」と。この者たちは歴史の流れの中で、それぞれが殉教の血で衣を赤く染めた者たちである。彼らの血染めの衣服は小羊の血で洗われることで白くされたのである⁸。この天上の生活は地上の迫害の嵐の中を生き抜いているキリスト教徒たちにとっては、「天路歷程」という大いなる希望となった。

日本には「雲のごとき証人」⁹が存在する。1597年に豊臣秀吉の迫害により長崎の西坂で処刑され、1862年6月8日にローマ教皇ピウス8世により列聖され、聖人の列に加えられた日本26聖人や、2008年11月24日に福者に列せられたペトロ岐部と187殉教者たちや無数の名もなき殉教者たちに共通していることがある。それは殉教の死の最後の場面で、ヨハネ黙示録7章が記す天の殉教者たちと同じく、神を賛美したことである。26人のキリシタンが現在の長崎駅に近い西坂に立てられた十字架に鉄の輪でしばりつけられ、最後の時を迎えようとした時、彼らは「主をほめたたえよ、神の子らよ」と詩篇を歌った。それに続いて一人の者が「日本のどの教会でもラテン語ミサの中の奉献のときに歌う感謝の祈り『聖なるかな』を歌い始めました。最後の旋律が港に漂うとき、また別の十字架にはりつけられているフランシスコ会の神父が『イエス様、マリア様……イエス様、マリア様』と、短い祈りを始めると、群集の中にいる4000人のキリスト教徒達もその祈りに唱和しました。」とされている¹⁰。それから先の論文で

8 『ヨハネの黙示録』7章14節。

9 『聖書』日本聖書教会発行、1976年版、ヘブル人への手紙12章1節、「多くの証人に雲のように囲まれている。」

10 『長崎の歌』パウロ・アロイジウス・グリーン、マリスタ会発行、第6刷、2001年8月、69-70頁。

も取りあげたが、36年後の徳川幕府の禁教令の際に捕縛されたミカエル菜屋も「すべての国よ、神をたたえ、すべての民よ、神をほめよ」と突然歌い始めた。「貧しい人の隣人となるために、長崎のすべての坂という坂を知り尽くした男は、連行される最後の坂を、神への賛歌で締めくくろうとしたのである。」¹¹殉教者たちは活けるときも死せるときも、唯一の礼拝行為として、詩篇117編を賛美した。そうすることは天上の礼拝に梯子を架け、さらに天上の礼拝に駆け上ることを意味していた。

ここでカトリックにおける殉教者そのものの定義を確認しておかねばならない。

カトリック歴史神学者、ジャン・ダニエルーは『キリスト教史1』¹²キリスト教殉教者の靈性に関して、1. 殉教者は再臨をまつことなく死後直接天国に入ることできる。(煉獄思想が成立後、これを通過して天国に入るとされた。) 2. 遺骨は礼拝の対象となった。3. サタンに対する勝利 4. キリストの受難のかたどり 5. キリストの死と復活への神秘的参与 6. キリストの真の弟子となる 7. 救いの完成と兄弟を救う力の獲得等々の要件をあげている。これらの殉教の靈性に加えて、詩篇117編の詠唱の意義を加えたい。

詩篇117編は「ハレルヤ」詩篇であり、全詩編の中でもっとも短いものであるが、その賛歌の広がりは無限に広く深い。神賛美への招きは「せよ」との命令調賛歌であるとともに「すべての国よ」「すべての民よ」とあのイスラエル宗教と諸民族との葛藤の状況の中で、人種と国境をこえて呼びかけられている。「この詩においては、主をほめ讃えることへの呼びかけは、

11 『ベトロ岐部と一八七殉教者』日本カトリック司教議会列聖列副特別委員会・編、カトリック中央協議会発行、45頁。

12 『キリスト教史1』ジャン・ダニエルー (Jean Daniélou) 上智大学中世史研究所編訳／監修、平凡社出版、2009年5月第7版、287-289頁。

可能な限り集いうるすべての者にむけられているのである。」¹³との注解はまさにそのまま理解できる。詩篇注解者 J. L. メイズは「ここでの主への讚美は、すべてのものが信仰と喜びに入れられないならば、完全でなく、本来あるべき讚美ではない。讚美の応答が地上のすべての民から湧きあがるまで、主は唯一の神とは認められないのである。」¹⁴と記している。このことは賛美の核心をついている。さらに、世界の国々は、この招きの呼びかけに応じることで、世界の基軸を見出すことができる。そうでなければ、「混沌として不安に満ちた、悲惨な、混乱した、自己破壊行為をし続けるしかない」¹⁵このことはまさにキリスト教徒迫害において起こったことである。迫害される者は水平的には終末論的地平に目線を合わせ、垂直的には直ちに天上の賛美の共同体の中の白い衣を身につけた一人になっている。主を賛美することの根拠はなにか、それは「主の慈しみ（ヘセド）」と「まこと（エメド）」である。「主の私達に対する真実の勝利こそ、私達の未来にある真理である。」¹⁶

キリスト者がこの詩を朗読し、また歌う時、神への讚美というものは、すべての民と共に一斉に讚美することを目指す時にのみ完全なものとなるということを、肝に銘じるのである。そしてキリスト者は、将来国々一他の国々と同様自分自身の国々が、キリスト者を圧倒している恵みの勝利の中に、御自身の存在を賭して世界を癒し支えて、その中心となられた方のみ業を見いだすであろうという燃えあがるよう

13 『詩篇』 J. L. メイズ (James Luther Mays) (左近豊訳)、「詩篇117編すべての国よ」日本基督教団出版局発行、2000年12月、558頁以下。

14 同書559頁。

15 同書同頁。

16 同書同頁。

な希望を持ちつつ、その勝利を世界に向かって証しするのである。¹⁷

以上のメイズの言葉を言い換えると、殉教者の最後の神への賛美は終末論的な信仰の告白であり、出来事の前にほとぼり出る聖なる神賛美である。

ここに再確認したいことがある。それはこの小論文がディートリヒ・ボンヘッファーに及ぼした讃美歌と詩篇の働きを跡付ける試みである、ということだ。この目的のためにヨハネの黙示録に記されている殉教者と歴史の中に存在した殉教者の詩篇賛歌との関わりは、ボンヘッファーの殉教精神を考察する上で、確かな導きになると考える。

I 殉教者ディートリヒ・ボンヘッファー¹⁸における詩篇と讃美歌

1. 殉教者としてのD. ボンヘッファー

『カトリック教会の教え』¹⁹の中で、皇帝礼拝や異教の神々への犠牲が求められたローマ帝国がなしたキリスト教禁教の時代に、そのような偶像礼拝を拒んで、「拷問なども耐えて信仰のあかしをした人を『告白者』、殺された人を『殉教者』とよび、彼らには特別な敬意が払われました。』²⁰としている。この区別を1930年にあてはめれば、ボンヘッファーはキリスト教殉教者である。ボンヘッファーにおいて殉教の意識と決断が彼のヒトラ

17 同書560頁。

18 Bonhoeffer, Dietrich 1906-45 ドイツの神学者、牧師。第二次世界大戦中、ドイツでA. ヒトラーへのドイツ教会闘争に参加し、ヒトラーへの暗殺計画を理由に逮捕、1945年4月フロッセンビュルク強制収容所で処刑され、キリスト教殉教者となった。

19 『カトリック教会の教え』新要理書編纂特別委員会編集、日本カトリック司教協議会発行、139頁。

20 同書同頁。

一への抵抗運動のプロセスのいつで起こったかは重要な関心事である。この問題を扱うことはボンヘッファーの全生涯と残された著作を検討するほかはない。重要なことは、ボンヘッファーが「告白者」から「殉教者」への受容という意識の変化がいつ起きたかを確認することである。この当面の課題の究明のために助けとなる研究がある。それは政治学者山崎和明氏の『D. ボンヘッファー』—「抵抗と再建の論理と倫理」—である²¹。

山崎氏はボンヘッファーの生涯をドイツ教会闘争第一期（前期）と第二期（中期）そして第三期（後期）に分割している²²。第一期は1933年まで、第二期は1933年から1939年9月7日までである。時代を画する出来事として、あげられるのは1933年9月21日にベルリン—ダーレム牧師マルティン・ニーメラー²³らが宗教改革の精神と信仰を保持するため「牧師緊急同盟」（Pfarrernotbund）の結成をめざしたことである。18842名の牧師がその呼びかけに呼応した。この信仰告白を死守しようとする運動が告白教会（Bekennende Kirche）を生み出した²⁴。この告白教会運動は1934年5月29日から31日の間、バルメンにおける第一回「バルメン宣言」（Barmer Erklärung）²⁵を採択した。この宣言の特徴は、それが信仰告白運動であり、又自ら政治的決断として立つことにある。神学的な二つの主張が注目される。それは、十戒の第一戒に立ち、民族と国家の神格化が否定され、イエス・キリストを主とし、王なるキリストを至高の支配者とする純粋な信仰告白運動である。ボンヘッファーはこの時期、すでに、「キリスト集中論的」神学思想をもって政治的決断をしていたことは確かであろう。この信仰告

21 『D. ボンヘッファーの政治思想』山崎和明，新教出版社，2003年3月。

22 同書，69-92頁。

23 Martin Niemoeller 1892-1984.

24 『戦争・ナチズム・教会』河島幸夫，新教出版社，1993年3月，第一版第3刷，119頁。

25 正式な名称は「ドイツ福音主義教会の現状に関する神学的宣言」（Theologische Erklärung zur gegenwaertigen Lage der Deutschen Evangelischen Kirche）

白運動はヨハネ黙示録に語られているような、また、あたかもキリスト教会を残酷な迫害で苦しめ、歴史に名を刻まれているローマ皇帝にも匹敵するアドルフ・ヒトラーを拒絶するものであった。告白教会は当然の帰結として、ヒトラーの国策によるドイツ的キリスト者の教会である「ドイツ福音主義教会」すなわちドイツ帝国教会を否定することを、明確に宣言した。

ボンヘッファーのこの第一期の生き方は、「政治的闘争と教会的闘争とを明確に区別」²⁶し、信仰告白的教会の形成をめざしていたと見られる。山崎氏の指摘されるところによれば、1935年はナチが教会政策を変更した年。これを契機に「教会的抵抗がすでに政治的要素を表すことを否定しなかった」ボンヘッファーの教会闘争が新たな段階へと移行していくことになる²⁷。この年が第二期の始まりとなる。1936年2月29日から3月1日スウェーデン旅行中の講演でバルメン宣言の神学主張に加えて、「神の言葉に対する絶対にして単純な服従」と「キリスト共同体、における交わり」が述べられたという²⁸。ボンヘッファーは彼の活動の第二期を特徴づける『服従』と『共に生きる生活』を神学の課題として、政治的苦難の中で考察し主張してゆく。彼は「革命や転覆を認めないのみならず、『自らのあらゆる〔固有〕の権利を断念する』」することを主張した²⁹。ボンヘッファーは教会の政治的課題として、国家権力に対しての転覆・反乱・革命の企てを承認せず、むしろそれは神の国の到来を遅延させるものと見ている。そして、徹底的無抵抗の立場を求める。「右の頬を打つなら、他の頬もむけてやりなさい。」(マタイ5章39節)を文字通り実践させようとした。山崎氏は次のように記している。

26 山崎和明, 上掲書, 69頁。

27 同書同頁。

28 同書70頁。

29 同書72頁。

キリストのゆえに、「悪人に手向かわず」(N115)、「無防備のまま
でそれを耐え忍ぶ」(N116)。自らの権利を放棄し (N115)、悪に対し
ては悪をもって抵抗せず (N116)、「自ら進んで抵抗を断念する」
(N117)。すすんで無防衛となり (N117)、「悪を行き着くところまで
行かせ」(N117)、悪を悪として露顕させ、ついに悪を無力にさせる。「悪
がひとりでにやむことによって」(N116)、「悪を克服すべきである」
(N117)。それが悪を克服する唯一の方法であるとボンヘッファーは
論じている。ここには、非暴力的抵抗というよりは、無抵抗が説かれて
いる。もちろんそれは、悪への同調、協力を意味してはいない。

そして続く「敵」という章では、価値の大逆転と言うべき愛敵の思
想が展開されている。

『しかし私はあなたに言う。敵を愛し、呪う者を祝福し、憎む者に
親切を施し、辱め迫害する者のために祈れ。』³⁰

ここに明確に志向されているボンヘッファーの立場と神学思想は、イエ
スの十字架の神学である。これは徹底したイミタチオクリスティである。
イエス・キリストに中に生き、イエスのように振る舞い、イエスのように
死することを願う生き方である。

ボンヘッファーの生涯の第二期は徹底した「告白者」の立場であると考
えられる。当然ながらキリストに従う者のそのようなあり方は、獄につな
がれることを覚悟し、殉教の死を招来することになる。そのことをボンヘ
ッファーは誰よりも鮮明に見ていた³¹。

教会闘争第三期（後期）の期間を1939年-1945年とすれば、1939年6
月20日という日付は重要である。ボンヘッファーはニューヨーク・ユニ

30 同書73頁, N, Z = Hg. E. Bethge, Nachfolge. 1937. 10. Auf1. 『服従』[⇒DBW4,1989]
以上, 山崎和明「凡例」よりそのまま引用。

31 同書74頁。

オンセминаリーの神学教員として迎えられ、神学者としての歩みが約束されていた。しかし、アメリカ滞在一ヶ月が来る前に、ドイツへの帰国を決意し断行した。ボンヘッフアーは彼の招待者でもあったアメリカの神学者ラインホルト・ニーバー³²宛てに書いた手紙で決意したことについて記している。「私は、自分がアメリカへ来たのはまちがいだった、という結論に達しました。私は、私たちの国の歴史の困難な時期をドイツのキリスト者たちと共に行きなればなりません。」この心境の心底には危機せまるドイツ国内とヒトラーによる戦線拡大、さらにはユダヤ民族への迫害のことがあった。1939年9月1日にドイツ軍はポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発した。こうした政治状況の急速な事態は、ボンヘッフアーにはナチズムに対して剣をもって抵抗する必要性を認めさせることにつながった³³。

ボンヘッフアーの場合は、やがてこうした当初の兵役拒否ないし平和主義の路線を乗り越え、教会的抵抗の枠からも離れて、ついにヒトラー打倒をめざす《政治的抵抗》、《能動的抵抗》の企て、つまりヒトラー暗殺計画に参加するようになった。こうした能動的な抵抗の形態は、告白教会の会員であった弁護士ハンス・コッホ（1893-1945）および判事補フリードリヒ・ユストゥス・ペーレルス（1910-1945）などの人びとによっても追求されたところである。しかし、告白教会自体は、教会組織としては、こうした能動的抵抗を奨励したことも、指令したこともなかった。ドイツの告白教会が考え、実践した抵抗は、ボンヘッフアーらの抵抗とは異なる形態の抵抗であって、それは、《教会的抵抗》、《受動的抵抗》だったのである。³⁴

32 Reinhold Nieber 1892-1971, ニューヨーク・ユニオンセминаリーの教授。

33 同書80頁。

34 河島阿幸夫, 前掲書225頁。

ボンヘッファーは1942年にヒトラー暗殺計画に参加したとされる。この年の春ノルウェー旅行に先立って、ボンヘッファーと法学者で義兄のハンス・フォン・ドーナニーたち、さらに転覆への参加者たちには危険が迫っていることが知らされた。「そこで、ボンヘッファーは、旅に立つ前に、自分の遺言を文書の形に書きとめた。というのは、彼のこの新たな旅行に与えられた使命は、かなり直接的に国家治安庁本部の感心領域にかなり踏み込んで遂行されなければならなかったからである。」³⁵ ボンヘッファーはヒトラー暗殺計画に参加したことで死を覚悟した。1943年4月にゲシュタポに逮捕され、ベルリンのテゲル刑務所に拘留された。ボンヘッファーはこの逮捕をもって「告白者」の時期を終えることになる。この時からキリスト教「殉教者」の道を進むことになる。1945年4月9日にフロッセンビュルクで殉教者として39歳の生涯を閉じた。

1944年7月20日、ヒトラー暗殺は失敗に終わり、暗殺計画の首謀者の一人クラウス・フォン・シュタウフェンベルクは処刑、暗殺グループに関わっていた兄クラウス、義兄リュエディガー・シュライヒャーも逮捕される。

1945年4月にヒトラー暗殺計画の一員であったヴィルヘルム・フランツ・カナリス提督の日記からボンヘッファーの関与が発覚。わずかに数日後の4月8日、ボンヘッファーはフロッセンビュルク強制収容所へ移送されて死刑判決を受け、翌日絞首刑に処された。³⁶

この時の収容所医師が、10年後報告書を書き、次のように記している。以下はE. ベートゲの『ボンヘッファー伝』第四巻、503頁からの再録であ

35 『ボンヘッファー伝』第四巻、E. ベートゲ（森野善右衛門訳）、新教出版社、2005年12月、148頁。

36 インターネット、『Wikipedia』[ボンヘッファー]。

る。

フロッセンブルクでは、この同じ月曜日の朝の薄明の中で、六人の処刑が行なわれた。収容所の医師が、ボンヘッファーの最期の場面を見ている。その時には彼はまだ、ボンヘッファーがどういう人物であるかということとは知らなかった。それから10年後に、彼は次のように書いている。

その日の五時から六時の間に、カナーリス提督、オスター將軍、……そして帝国裁判所判事ザックを含む囚人たちは、獄房から引き出され、戦時裁判所の判決文が読み上げられた。バラック建ての一つの部屋の半開きの扉を通して、わたしはボンヘッファー牧師が、着ていた囚人衣を脱ぎ棄てる前に、床にひざまずいて、彼の主なる神に真摯な祈りを捧げているのを見た。この特別に好感の持てる人物の祈りが、いかにも神に身をゆだね切って、神は確かに祈りを聴きたもうという確信に溢れていたのに、私は非常に深い感銘を受けた。処刑される時にも、彼は短い祈りを捧げ、それから力強く落ち着いて、絞首台への階段を昇って行った。死はその数秒後におとずれた。私は今まで、ほとんど五〇年にわたる医者としての生涯の中で、このように神に全くすべてをゆだねて死に就いた人を見たことはほとんどなかった」（ヘルマン・フィッシャー —ヒルシュトルンク「フロッセンブルクからの報告」、『出会い』一九二頁）。

この一収容所医師の証言は、マルコによる福音書15章のイエスの死の光景を思わせる。イエスが大声を出して息を引き取られた光景を見ていたローマ軍の百人隊長が「本当にこの人は神の子だった」と言った。ボンヘッファーの最後を見届けた医師は「本当にこの人は聖なる殉教者だった。」

と告白をしているのである。邦訳『抵抗と信従』³⁷はテゲルの獄中におけるボンヘッファーの最後の生きる様子を伝えている。この書はボンヘッファーの殉教の精神を知る上で貴重である。そこには、神を賛美する聖なる殉教者のボンヘッファーをみることができる。賛美するボンヘッファーである。

2. 神賛美に生きた殉教者 D. ボンヘッファーと讃美歌

① 讃美歌と詩篇を愛する家庭

ボンヘッファーと讃美歌の関係を知るのに、『ボンヘッファー家のクリスマス』³⁸はすばらしい資料である。この書はボンヘッファーの双子の妹ザビーネ・ライプホルツ³⁹によって書かれた。本書は両親が結婚して、二人が祝った家庭のクリスマスのクリッペ⁴⁰の様子から始まる。楽しいボンヘッファー家の思い出の重なりの中に、貧しい人々を招いて贈り物を行い、クリスマス劇で楽しく祝った思い出が記されている⁴¹。母が取り仕切ったこの習慣は「共に生きる」ことの祝福を早くも幼い日に体験させるものであったに違いない。この書の思い出は、ボンヘッファー家のクリスマスが讃美歌に溢れた祝祭であり、それとともに、詩篇朗読によって導かれたクリスマスであったことを語っている。この書の61頁以下に、1918年の悲しいクリスマスが記されている。兄ヴァルターが第一次世界大戦のとき激戦の西部戦線で戦死した。若干18歳で。母は詩篇90篇を暗誦していたが、

37 『抵抗と信従』D. ボンヘッファー(倉松功/森平太訳)「ボンヘッファー選集V」, 新教出版社, 1976年12月, 第6版。

38 『ボンヘッファー家のクリスマス』ザビーネ・ライプホルツ=ボンヘッファー(ロコバルト・靖子訳), 新教出版社, 1993年11月。

39 *Weihnachten im Hause Bonhoeffer von Sagine Leibholz-Bonhoeffer*, Guetesloer Verlagshaus Gerd Mohn, Guetesloh, 1971.

40 クリッペ: ドイツ語で Krippe, イエス降誕の情景を木彫などで(粘土細工も) 聖家族や東方の三博士, 羊や牛などが待降節からか家庭や教会堂に置かれる。

41 ザビーネ・ライプホルツ, 前掲書, 22頁。

母の目はそれでも聖書の行を追って朗読したという。家庭で重んじられていた詩篇朗読の習慣は、ボンヘツファーの大いなる影響を彼自身の中に刻印したはずである。この詩篇朗読には讚美歌がともなっていた。

この最後の言葉が終わると、母はまず父を見、そして私ども皆を見ました。それは歌を始めても良いという合図でもあったのです。そして三十年戦争の頃すでに歌われていたという、パウル・ゲールハルトの新年の歌を歌い出しました。私ども兄弟姉妹はこの十三節をすべて暗記しており、毎年この歌を歌うたびにその意味も深まって行くのでした。やがてろうぞくの火が消え始め、ツリーの枝がクリスマスの部屋の天井に長い影を投げかける頃、私どもはふっと物想いにふけりながら、つぎの節を歌うのでした。

いざ、歌声と祈りもて、
我らをして主のみもとへ、
我らが生のいとなみに
この日まで力を与え給うた
主のみ前に、行かしめよ

また、パウル・ゲールハルトの病める者や悩める者を思う詩が父は特に好きでした。

病める者皆を、
慈悲の心もて助けたまえ
うれいに苦しむ
暗い悲しみの心に
喜びを与えたまえ⁴²

42 上掲書，69-70頁。

ザビーネ夫妻がロンドンへ避難していた1943年以後の、ボンヘッファー一家と親族を襲ったナチの暴虐の時、クリスマスは「眠れぬクリスマスの夜」となっていた。そのような時、「恐れることなかれ」という聖書の言葉が、真のなぐさめとなった。ザビーネはこの書の読者を獄中におけるディートリヒの詩作である『過ぎ去りしもの』へと導く。

されば我、新しき御声をば聴けり、
「感謝と痛悔によりて
過ぎ去りしもの、汝がいのちの
不壊なる核となりて
再び汝のもとに帰り来たらん。
過ぎ去りしものうちに、
神の赦しと和らぎをば肯い、
神、今日もあすも汝を守りたまえと祈るべし」と⁴³

(高橋裕次郎訳)

本書の最終章は1944年のゲシュタポ監獄の鉄格子付地下牢で両親と婚約者に送った詩で終わりへと導く。「よき力に限りなく守れて、我らは慰めを得、来るべきものをまつ。朝に夕に、そして必ずや新しい日毎に、神は我らと共にいましたもう。」とボンヘッファーの詩作は終わる⁴⁴。

②パウル・ゲルハルトから受けた神賛美

『抵抗と信従』を読むと、ボンヘッファーは神を賛美することが幼少期から身につけていたことが分かる。すでに述べたように、このよき習慣は

43 同書、115-116頁。

44 同書、142-143頁。

古くはルター時代から続く敬神を重んずる教養家庭に始まり、長く継承されてきたものであった。先にみてきたように、ボンヘッファー家ではパウ
ル・ゲルハルト⁴⁵の作った讃美歌が歌われ、彼はそれに親しんで成長した。
そのパウル・ゲルハルトはドイツ宗教改革時代のルター派の讃美歌作詞者
である。このゲルハルトの名前が『抵抗と信従』には繰り返して出てくる。
テゲルからの両親に宛られた、1943年4月14日の手紙に「ちょうどこ
の僕のように、パウル・ゲルハルトの讃美歌を読み、それを暗記するのが
有益です。ともかく有益です。ともかく僕は自分の聖書とここの図書室の
読物とを持っております。今は書く紙も十分にあります。……十四日前の
今日は七十五回目のお誕生日でしたね。あの日は素晴らしい日でした。多
くの人の合唱と楽器とが奏でる夕べの讃美歌が、今なお僕のもとに響いて
来ます。「力強き豊なる主をほめたたえまつれ。……恵みの御神は悩みい
かに深くとも、御翼をのべ給わざることなければ」と。そうです、僕たち
はこの恵みの神にもっと信頼して慰めを与えられたいものです。——さあ、
春が実に力強くやってきます。お庭のお仕事も増えて来ることでしょう。

45 Paul Gerhard 1607-1676, ザクセン州グレーフェンハイニヒェン生まれ。

ドイツの宗教詩人(教会), ルターと並んで最も重要なルター派の讃美歌作詞者。
ザクセンのグレーフェンハイニヒェン生まれ, ヴィイツテンペルク大学で神学を
修め, 51年ミツテンヴァルデの監督教区長, 57年ベルリンのニコラス教会副牧師,
改革派の大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムによる寛容令への署名を拒否, 66
年免職。小村リュツベンの教区長補佐として生涯を閉じる。彼の130余編にのぼ
る詩は, ベルーンのcantor, J. クリュエーガーとその後継者 J. G. エーベリング
の作曲により流布(『歌による敬虔の修練』1644)。M・オーピッツの詩作法改革
を讃美歌の領域で十全に開花させたもので, 言語あたりの優美さと自然さにより
際立つ。* 30年戦争に象徴される罪と悲慘を背景に, 聖書と教会の信仰告白の
公同性に堅く立ちつつ, 神への信頼と救いを内省的に歌った。約半数が自由詩で,
その他は聖書(主に詩編)や私的祈禱書などに依拠・「血潮したたる主の御頭(み
かしら)」「『讃美歌』54年版136番)は, J. S. バッハの* マタイ受難曲にも用い
られ, ゲルハルトの最も有名な讃美歌の一つ(⇒替歌)。ドイツの讃美歌集では,
ルターに次いで作品が多く, 「草木も人も眠りにおちて」(同41番), 「よろずを
治しらす」(同290番)などは, 世界各国で歌われる。[大角欣矢]

以上, 『キリスト教辞典』岩波書店, 367-368頁より引用。

この監獄の庭では、朝になると、今この夕べにも、つぐみの囀りが全くすばらしゅうございます。人は些細なことにも感謝するようになって来ます。確かにそれもまた賜物なのです。さようなら！」⁴⁶

1943年6月14日は聖霊降臨節にあたった。この日付の手紙には「パトモス島の聖ヨハネにあやかって」という言葉が記される。幻の獄中礼拝を、「お二人と」「僕がかつて聖霊降臨節を祝った教会の方たち」と祝ったことを、ボンヘッフアーは書いた。「皆がその席につらなっていたのです」と。そこに「パウル・ゲルハルトの聖霊降臨節の讃美歌の美しい節を昨夜から数時間ごとに口ずさんでは喜びを覚えています。」と書き添えている。「あなたは喜びの御霊」「喜びを強めたまえ」と賛美し、「僕はこの歌に、『もしあなたが悩みの日に気をくじくならば、あなたは弱い』（箴言二四・一〇）、『神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と憤みの霊なのである。』（IIテモテ一・七）という聖句をつけ加えております。』⁴⁷ この讃美歌は、ドイツ・バーデン州福音主義教会の讃美歌133番として歌われている。13節のながい讃美歌の人一つで、第6節にあたる。

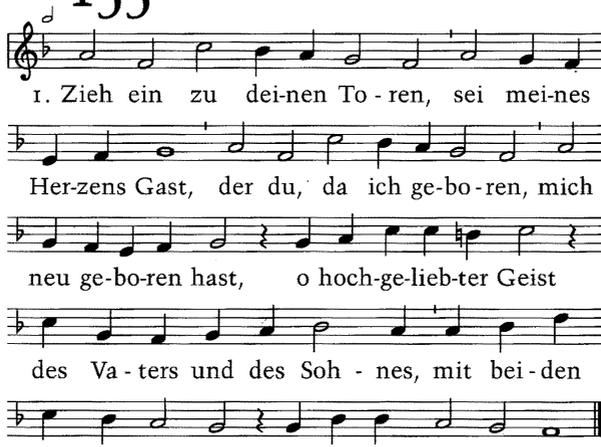
Du bist ein Geist der Freuden,/ von Trauern haeltst
du nichts,/ erleuchtest uns im Leiden/ mit deines
Trostes Licht./ Ach ja, wie manches Mal / hast du
mit suessen Worten/ mit aufgetan die Pforten/
zum gueldnen Freudensaal⁴⁸

46 『抵抗と信従』D. ボンヘッフアー、37頁。

47 ボンヘッフアー、前掲書、54頁。

48 Evangelischen Gesngbuch, Ausgabe fuer die Evangelische Landeskirche in Baden, 1. Auflage 1995, Evangelischer Presseverband fuer Baden e.V., Karlsruhe.
ドイツ・バーデン州福音主義領邦教会讃美歌133番、教会暦の聖霊降臨節の項。

I33



1. Zieh ein zu dei-nen To-ren, sei mei-nes
Her-zens Gast, der du, da ich ge-bo-ren, mich
neu ge-bo-ren hast, o hoch-ge-lieb-ter Geist
des Va-tern und des Soh-nes, mit bei-den
glei-chen Thro-nes, mit bei-den gleich ge-preist.

これらの言葉から獄中のボンヘッファーが命の危機、その終わりを強く意識させられる時に、神賛美に生きる証人としてその霊性が高められていたことを見ることができる。

1943年12月31日の書簡は「降誕節は終わりました。」という言葉で始まり、新しい年も苦難の日々となることの中で、彼は大晦日の夜パウル・ゲルハルトの讚美歌を歌う。

「歎きの門を通り行かせ、
至るところで血を流させたもうとも、
その後に喜びを注ぎ給え」⁴⁹

49 『抵抗と服従』, 84頁。

これはパウル・ゲルハルトの作った讃美歌の歌詞の一部に当たり、バーデン州国教会の讃美歌58番の10節にあたる。原詩は次のようになっている。

Schliess zu die Jammerpforten/ und lass an allen Orten/
auf so viel Blutvergiessen /die Freudenstroeme fließen
悲惨の入口の門をしめよ、
こんなに多くの 血が流された
すべての場所に、喜びの大河を
注がしめよ。(著者訳)

メロディーは以下のものである。

58



i. Nun laßt uns gehn und tre - ten mit Sin - gen
und mit Be - ten zum Herrn, der un - serm
Le - ben bis hier - her Kraft ge - ge - ben.

Blutvergiessen とは「血を流す」ことを表すことばである。この讃美歌を歌った時、ボンヘッフアーは確実に死を意識し始めていたであろう。

『抵抗と信徒』の中の「ある友人への手紙」は1943年11月18日の日付からはじまるが、重要犯人として隔離され、隣りの獄房に手錠をかけられたままの処刑目の死刑囚が収監されている状況の中で、「パウル・ゲルハルトによって、次に詩篇と黙示録によって、予期しないほどの助けを与

えられた。」と書いた⁵⁰。「限界状況」の中でパウル・ゲルハルトの讃美歌はボンヘッファーにとって生きる支えとなっていた。

1943年降誕節にボンヘッファーは収監された者の祈りを書いている。その全文は『抵抗と信従』93頁から99頁にわたる。そこにパウル・ゲルハルトの二つの祈りが記されている。E.ベートゲは『ボンヘッファー伝』(和訳)349頁に次のようにその次第を記している。「一九四三年の降誕節に、彼は獄中にある者たちのための祈りを書いた(『抵抗と信従』九六頁以下、邦訳九三頁以下)。「それは彼自身の祈りの実践と、彼が日ごとに詩篇やコラールに親しんで来たところから出て来たものであった。彼は、三位一体の神への呼びかけにおいても、聖書の言葉においても、少しも割引きしなかった。刑務所付き牧師であったダンネンバウムとペルヒョーは、ボンヘッファーの獄房に、法規上は認められていなかったけれどもはいることができたので、この祈りを獄房の囚人たちの間に配布した。」

「獄中にある者のための祈り」の中の「朝の祈り」第七詩句は獄中の服役者たちを運命共同体の親しい成員として思い起こし、「主よ哀れみたまえ」と祈る。

ボンヘッファーはこのパウル・ゲルハルトの詩を祈り歌った時、囚われ人運命共同体を考えていたであろう。

御前において、私に属する者を、共に獄にある者たちを、
この獄中で苦役に従うすべての者を、思い起こします。
主よ、憐れみ給え。私に再び自由を与え、
今この時、あなたの前に、人の前に、責任を負いうる生活をなさしめ
給え。この一日が何をもちたらそうと、主よ、あなたの御名はほむべき

50 『抵抗と信従』、89頁。

かな！

ボンヘッファーはいかなる者とも隔絶された獄舎にあって、交わりを絶たれた苦難の状況におかれている者らを、「共に生きる」神の民のメンバーとして強く意識しているのである。

刑務所付牧師のハラルド・ベルヒョー (Harald Poelchau) はこの詩を配布した時、収容者たちに特別に言い添えたといわれている。それはボンヘッファーがゲルハルトの詩に託して、獄舎の中の虐げられている仲間たちに伝えようとしていたことであった。それは「特別な困窮における祈り」の最後の詩句を通してであった。この詩句こそ作者ゲルハルトが自らの死の前にその苦しみ中で慰めを与えられた言葉なのであった。この詩節をもって、ボンヘッファーは死刑の執行と殺害を覚悟していることを伝えようとしたのであった。

私をあしらって下さい。

死ぬるも生きるも、御神よ、私はあなたの御許にあり、

あなたは私と共におられます。

主よ、あなたの救いと御国とを、

私は待ち望みます。

アーメン。

気落ちせず、恐れることなく

キリスト者は、置かれた場所にあつて

自らを常に見つめねばならぬ。

死が彼を疲弊のどん底に送ろうとも、

志気堅く、さどく静かに留まらねばならぬ。

死はわれらを死なしめえず、

むしろ、幾千の困窮より魂を救い出し、
激しい苦しみの戸を閉じて、
御国の喜びに通じる道を開く。

アーメン。

1943年の第四待降節の書簡にパウル・ゲルハルトの有名な讃美歌が記されている。

最近数週間、この讃美歌の「われことごとく回復せん」という句が幾度も浮かんでくる、というのである⁵¹。これはヨハン・クリューガーが曲をつけ、パウル・ゲルハルトが1653年に作詞した讃美歌の一節である。ボンヘッフアーは、その意味を「キリストが一切を回復したもう」と理解する⁵²。「すべてのものが、形を変えて、明らかに、あらわに、自己追究的な欲望の痛みからも解放されて、キリストの中に取り上げられ、保存されるということである」⁵³と。そして、エペソ書1章10節の万物復元(ἀνάκεφάλαιώσει = re-capitulation)というエイレナイオスの教説はすばらしい。エイレナイオスは紀元140年頃生れのフィリギア人で、スミルナ出身である。スミルナという都市は殉教者ポリュカルポスが司教として生きたところであり、殉教の信仰に満ちた歴史をもっている。エイレナイオスはポリュカルポスから使徒ヨハネの信仰の遺産を継承した。彼は177年にリヨンの司教に任じられ、ガリアの福音宣教活動とグノーシス主義に対しての神学的著作活動をした。彼はおそらく202年頃死去したと見られる。エイレナイオスを聖ヒエロニムスは殉教者として讃えた。トゥール司教の聖グレゴリウス(594没)も、彼の著作『フランク人史』の中でエイレナ

51 『抵抗と服従』, 133頁。

52 同上同頁。

53 同上。

イオスを殉教者と記述している⁵⁴。ボンヘッファーはこのエイレナイオスに賛辞をおくっている。

イレナエウス⁵⁵の教説は、すばらしい、また慰めに満ち溢れた思想だ。

「神は失われたものを再び探し出し給う」23ということが、ここにおいて成就されることになる。ところで、そのことを、P.ゲルハルトは、幼児キリストの口にのせて、「われことごとく回復せん」と言い表わしたのだが、そのように単純に飾り気なく語りえたものはほかに誰もいない。多分君も、これからの数週間に、この詩から何か助けを得るところがあるだろう。そのほか、僕はここ数日のうちに、「われこの飼葉桶の側に立ちて……」という讃美歌から初めて何かを発見したような思いがした。僕は、これまでは、この詩から得るところはそれほどないと思っていた。この詩を理解するためには、長くひとりであり、探思して読む必要があるようだ。そこにあるどんな言葉も、実にすばらしく豊かで美しい。ちょっと修道院的・神秘的な匂いはあるが、しかしそれもそこそこの程度だ。「われわれ」と言う場合、それと並んで、「私とキリスト」というものがあるが、その持つ意味について、この詩ほどよく歌っているものを僕は知らない。

「われこの飼葉桶の側に立ちて」は日本で歌われているクリスマスの讃美歌「まぶねのかたえに」『讃美歌21』の256番のことである。

エイレナイオスは神人キリストにおいて全てを見る教父である。その神学はキリスト集中論的といえる。彼はキリストにおいて神の救済が完成へ

54 『福音に生きる』鈴木宣明、聖母の騎士社発行、1994年6月、70頁。

55 『抵抗と信従』、133頁、(イレナエウス)22と邦文訳書ではなっているが、()と注ナンバーを削除して引用。

と導かれ、一切のものがキリストへと集められることを主張する。彼の著『異端者への反論』第二章二百二十八の箇所で「キリストのすべての働きこそ、すべてを引き寄せる力を持ち、全人類の全からだを十字架によってあがなった」と説いている⁵⁶。ボンヘッファーはキリスト集中論的に自己とキリストの一体性による回復を見ている。それを後押しする慰めの讃美歌、それがパウロ・ゲルハルトの《Fröhlich soll mein Herze springen dieser Zeit》である⁵⁷。

36 (Ö)

1. Fröh-lich soll mein Her-ze sprin-gen
die-ser Zeit, da vor Freud al-le En-gel sin-gen.
Hör-t, hör-t, wie mit vol-len Chö-ren al-le Luft
lau-te ruft: Chri-stus ist ge-bo-ren!

ボンヘッファーはここで、アウグスティヌスの「ああ善き主よ」にシュッツが曲をつけた讃美歌の一節について述べ、「復元」は「肉」のことでなく「霊化」でもなく、聖霊による新しい創造という意味だと説明する。そして「キリストによってこれを回復せしめられることはできるし、また許されるということだ。(とにかく、僕の埋葬の際には、『主に願うことは』、

56 鈴木宣明，前掲書，74頁。

57 Evangelisches Gesangbuch より，37番，第9節までであるが，4番がボンヘッファーの言及しているところである。

『神よ、とくわれを助けたまえ』、『ああ善き主よ』を歌ってもらえば有難い。)」そのようにしたためている。

ボンヘッファーは1944年3月27日の手紙で、讃美歌、それも復活節の讃美歌への渴望を記している⁵⁸。なぜなら、「復活節の讃美歌」は「新しい肉体」を獲得させるからだ⁵⁹。そしてこう言うのである。「復活節といえば、僕達の思いは死 (Tod) そのものよりもむしろ死ぬこと (Sterben) の方に集まる。」それは死ぬことをいかに処理するかということであり、死を克服することであり、復活を意味するということである。ボンヘッファーは「復活から生きる」ということを彼の死の理解を述べる中で告白している。死は生のはじまりなのである。

キリストがご自分の苦しみとの最も密接な交わり、すなわち殉教にふさわしい者と認め給うのは、ご自分に従う者たちの中でも極めて僅かの者たちにすぎない。ここでは、弟子の生活は、イエス・キリストの死の姿と最も深い同一性を持っていることを示す。キリストのために人々の前ではずかしめられ、苦しみ、死ぬことにおいて、キリストはその教会の中に見える姿をとり給う。洗礼から殉教に至るまで、それらはいずれも同じ苦しみであり、同じ死である。十字架につけられ給うたかたによって神の似姿が新しく創造されることである。人となり給うたかた・十字架につけられ給うたかたとの交わりの中にある者、また、人となり・十字架につけられ給うたかたがそこで姿をとり給うている者、そういう人は、栄光を受けたもうかた・よみがえり給うたかたとも同じになるであろう。「わたしたちは、天に属している

58 『抵抗と信従』、177頁。

59 同上。

かたちをとるであろう」(Iコリン上五・四九)。「わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(Iヨハネ三・二)。十字架につけられ給うたのかたちがそうであったように、よみがえり給うたかたのかたちもまた、それを見る者の姿を変えるであろう。キリストを見る者は、そのかたちの中に引き入れられ、その姿と同じにさせられる。まさしく神のかたちの鏡となるのである。既にこの地上において、イエス・キリストの栄光がわれわれの中にその映像をうつすであろう。われわれは、十字架につけられ拾うたかたの死の姿の中に生きているのであるが、困窮と十字架の中にあるその死の姿からは既に、よみがえり給うたかたの光輝と生命とが輝き出るであろう。そして、神の似姿に変えられて行くその探さはますます深くなり、キリストのかたちはわれわれの中でいよいよ明らかになるのである。⁶⁰

長文引用ではあるが、詩篇119編をこよなく愛したボンヘッファーは神の義を貫いて生きぬくキリスト教徒殉教者であったことを、この引用文は証言している。キリスト教史の中の数知れない殉教者がそうであったように、彼は神を讃えつつ新しい命の歩みへと向かった義の証人であった。ボンヘッファーの地上での最後の礼拝は復活節後第一主日であった。彼は請われて司式を行った。その日の聖書日課を朗読した。イザヤの苦難の僕の箇所である53章と第Iペテロ1章3節であった。この礼拝の後、「囚人ボンヘッファー、用意して同行せよ」と二人の民兵が叫んだ。最後に託した言葉は「これが最後です。私にとっては生命の始まりです。」だった。

ボンヘッファーがパウル・ゲルハルトの讚美歌に慰めを受けつつ刑に処

60 『キリストに従う』ディートリヒ・ボンヘッファー (森平太訳)、新教出版社発行、2007年6月、第2版第8刷、353頁。

されることになる1945年への年の変わり目に、他者のために、彼自ら讃美歌を生み出すことになった。捕えられ、監獄で夜拷問を受け叫び声をあげている獄友のために。別離の悲しみに泣く家族のために。自らの亡きあと生きていく若い人たちのために。彼はさらに老齢の父に対しても「私の中の太陽が消えたら、私に代わって生きてほしい」と言葉を残している。

最後に〈善き御力持つ者らに〉という彼の作った最後の讃美歌を紹介したい。これは、ドイツの讃美歌集では637番に信仰・愛・希望の曲として採用されている。第二次世界大戦が終わってから、この詩に17人の作曲家達が旋律をつけ、世界各地で歌いつがれている。

「善き御力持つ者らに」

善き御力持つ者らにかかわりなく静かに囲まれ
護られ、こよなく慰められ
わたしはこの日々をあなた方とともに生き
ともに新しい年へと入ってゆく

いまなお古い年は私たちの心を苦しめ
いまわしい日々が私たちに重荷を負わせようとする
ああ、主よ、私たちの愕然たる魂を救いたまえ
そのためにあなたは私たちをお造りになったのです

あなたの差しだされるのが重く苦い苦悩の
なみなみつがれた盃であろうとも
私たちはあなたの好ましい御手よりそれを
震えることなく感謝にみちて受けましょう

でも今一度あなたが私たちにこの世界と
その太陽の輝きの喜びを贈ってくださるなら
私たちは過ぎ去ったものを思い起こしつつ
人生を安んじてあなたに委ねます

私たちの暗闇にもたらされた蝋燭の火を
今日は暖かく明るくともしてください
なるうことなら私たちをまた一つに導いてください
知っています、あなたの光の夜輝くことを

深い静寂が私たちのまわりに広がるとき
眼に見えることなく私たちをつつむ世界の
かの澄んだ響きに私たちは耳を傾けます
あなたの子らすべての気高い賛美の歌声に

善き御力持つ者らにこよなく庇護され
何が来ようと心安んじて私たちは待とう
夜も朝も私たちのかたえに神はつねにある
そしてまちがいなくどの新しい日にも

おわりに

本拙論は、デイトリヒ・ボンヘッファーにおける讃美歌と詩篇の関係を述べてきた。詩篇との関わりはさらに続編として論及しなければならぬが、ここではボンヘッファーという現代の殉教者と讃美歌の関係をあとづけることがある程度できたと考える。「殉教者」という位置づけに問題がないわけではない。この「殉教者」という言葉が、カトリック教会のい

う「聖人」と同義であるなら、誰よりもボンヘッファー自身がこのように言われることを忌避したにちがいない。ボンヘッファーは「キリスト論的集中」の神学に立つ教会闘争の神学者だった。偽りの教会がまことの教会をおおい隠し、十戒の第一戒を告白し、唯一の王なるキリストを信仰告白する者を処刑する暗黒の迫害時代の中、ボンヘッファーは、地上の教会にとどまり、主と共に、「わたしにつまづかない者は幸いであるという歌」を歌った⁶¹、讃美歌作者であり讃美歌の詠唱者だった。さらに言葉を重ねれば、ボンヘッファーは徹底した讃美歌を歌うマルチュリアだった。播祭の犠牲の小羊として自らを献げつくした主イエスに習って、自己を譲与し尽くした。それがボンヘッファーの歩みであった。絞首刑の階段は地上の最後の踏み段であった。しかし、独裁者たちには隠されているが、見えない天上への階段がつづいていたのである。天上の証人たちに「雲のように囲まれ」て、讃栄を歌いつつ、その階段を上ったであろう。その時、彼を喜びをもって迎えたに違いない宗教改革者マルティン・ルターの言葉を、ここに引用したい。

要するに、われわれの栄光は、キリストのいます天にあるのであって、市場の小売商人のように、目に見える世界の中にはない。それゆえ、つまずき、暴徒ら、異端、欠陥などをして、その欲するままにあらしめ、かつ行為させよ。福音の言葉さえわれわれのもとでいつまでも純粹であり、またわれわれがその言葉を大切にしさえするならば、たとえどんなに事情が悪くならうとも、キリストはわれわれのもとに、われわれとともにいたもうのだということを、疑ってはならない。われわれがこの書物（『ヨハネの黙示録』を指す。著者による加筆。）

61 「マルティン・ルタ『聖ヨハネの黙示録への序言』一五三〇年」, エドワルト・ローゼ, 前掲書, 235頁。

で知るとおり、キリストはあらゆる災害、獣、悪しき天使をとおして、またこれらを越えて、やはりその聖徒らのそばに、また聖徒らとともにいまし、そして最後に勝利したもうのである」。⁶²

—主にのみ栄光あれ—

62 同上同頁。